



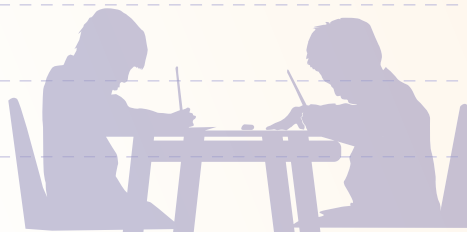
特集

# 「小6 合判模試」 中学入試レポート vol. 4

## これが合格への カギになる！

### 2021年入試の変化のもとで、 チャンスを生かす受験校の選び方

9月以降、夏休みを終えて、6年生が本格的な入試対策に取り組み始めてから、すでにひと月が過ぎ、来年1月～2月の入試本番まで残り3か月～4か月となった。保護者の皆さんも、いよいよ併願校も含めて、受験する学校を決めていく時期にさしかかっている。年ごとに多くなる入試要項変更によって“激動”が恒常化してきた中学入試だが、今年はさらに“コロナ禍”という状況下で、来春2021年入試はどうなるのか。目立った動きを確かめておくと同時に、そこで生まれるチャンスを生かす、受験校の選び方を探してみよう。



首都圏模試センター

## “withコロナ禍”での実施は避け難い 来春2021年の首都圏中学入試

毎年、多くの入試改革が行われることで目まぐるしく人気動向が変わってくる首都圏中学入試。例年、前年入試の直後から、次年度に向けての入試変更が次々と公表され、それぞれの学校の志望者数や難易度の変化、全体的な人気動向の変化などが、その翌年入試に関する話題となっていく。とくに今年は、コロナ禍の影響で、入試にどのような変化や人気動向が表れるか予断は許されない。

例年よりも短くなった夏休みを終え、小6受験生の皆さんは、9月から来春2021年の中学入試に向けて、本格的な問題演習に入り、実戦的な力を育てていくと同時に、受験校を決めていくための準備を進めている時期だろう。

しかし、9月半ばの時点でもまだ、有効なワクチン開発のニュースを聞くことができない現状から考えると、来春2021年の中学入試が、“withコロナ禍”で行われることは、ほぼ間違いない状況になってきた。

全国の小・中・高校の大半が、6月以降には生徒の登校を再開し、新型コロナウイルスの感染予防のための安全対策の工夫を凝らしながら、何とか6～9月にかけての学校活動を継続してきた。ただし、経済活動も徐々に回復しているとはいえ、コロナ禍はまだ去ったわけではなく、緊急事態宣言による外出自粛要請の期間と比べても、決して事態が好転したとはいええない状況がいまも続いている。

そうした状況下で、7月から8月にかけて、全体的には例年よりも遅れて、各私立中学校の2021年入試要項が次々に公表されてきた。それら最新の入試動向と、塾関係者や受験生保護者の声を含めて、現時点で考えられる来春の中学入試での様々な動きのなかで、合格を得るためのヒントを探っていきたい。

## 現在の“コロナ禍”が 日本の教育の変化を加速させる！

そういう意味で、今春2020年入試の結果やその前後の目立った動向から、来春2021年の首都圏中学入試の行方を占うとすれば、やはり意識すべきは「日本の教育と入試の変化」だ。

そして、皮肉なことに、今年の“コロナ禍”による3月～5月の休校期間が、その変化を加速させる役割を果たした。この間、登校できずに在宅での学習を余儀なくされた生徒に向けて、大半の私立中が実現したオンラインによる“学びを止めない”教育活動の継続が、今後の新たな学校教育の可能性を切り拓くと同時に、学校の存在意義をも、あらためて考えさせる契機となった。

確かに、学校という教育環境に多くの生徒と先生が登校して一堂に集い、友達や仲間と一緒にいるからこそできることの価値は、休校期間にいつそう浮き彫りにされることとなった。学校や先生、同窓や部活の仲間、友達との「つながり」が、生徒一人ひとりの学習のモチベーションや健全なメンタル面の維持に、いかに大きな役割を果たしてきたかが再認識された。

その一方で、知識を習得するための学習であれば、オンラインでもかなり効果を上げられることも、この休校期間にある程度実証され、今後に向けての可能性も見出されるようになってきた。

また、オンラインという形態であっても、生徒同士が意見や考えを交わし、ともに学ぶ仲間と一



来春2021年入試では、合格発表を  
<img alt="camera icon" data-bbox="886 736 900 750"/>で実施する校舎中の今春入試風景。



# 特集

## これが合格へのカギになる！

2021年入試の変化のもとで、チャンスを生かす受験校の選び方



4科目の教科型入試のなかで「思考力・表現力」を問いつづけてきた麻布中（写真は2020年入試風景）。

緒に、課題に対する最適解を導き出すといった、いわゆるアクティブラーニング・探究型の授業も可能なことを、多くの私立中高が実際に試し、手応えを感じることができたという。

そして、緊急事態宣言による外出自粛要請が解除された6月以降には、生徒と教職員の安全を確保しながら、登校しての学校活動を再開した私立中の多くでは、当初の分散登校や時差登校と併用して、オンラインでの授業やホームルーム、面談などの学校活動も継続し、いわば“ハイブリッドな”教育活動を行ってきたことも、今後の新たな教育のあり方とその可能性を示唆する貴重な経験になった。

さらには、この10月までに予定されていた文化祭や体育祭などの学校行事や、学校説明会・見学会、オープンキャンパスなど「受験生と保護者が学校を知る」ための機会も多くが中止や延期を余儀なくされ、その多くがオンライン化されることになった。

部活動も含めて、こうした教科外（授業以外）の様々な学校活動が“コロナ禍”によって制限されたことは、在校生や教職員、保護者にとっては非常に残念なことだったに違いない。

しかしその一方で、生徒が主体的に「オンライン文化祭」を非常に高いクオリティで実現したり、他校や海外の姉妹校・教育提携校とオンラインでの交流や課題に取り組むコラボレーションを実現したりという、立地や互いの環境の制限を超えてのオンラインならではの“新たな学び”も各校で広がっていった。

## 「学校を知る」ためのアクションも、リアルとオンラインの両方で！

そして、自校の教育内容を「できるだけ多くの受験生と保護者に知ってほしい」と願う私立中学校の側も、この“コロナ禍”の安全面の考慮から、「学校に来て、実際に学校の様子を見てもらう」ことを自粛せざるを得なかった数か月の間に、「自校を知ってもらう」ためのオンラインによる学校紹介の動画や手法を拡大と進化させ、そのクオリティもアップさせた。

たとえば首都圏模試センターでは、今年度4月～9月まで、私立中会場では実施せず「自宅受験」と「塾内受験」のみで実施してきた「合判模試」や「適性検査型模試」に際して、有志の私立中学校のご参加（最盛時は約120校が参加）によるオンラインでの「おうちde説明会・相談会」という、Web上で「学校を知ることができる」「学校に質問や相談ができる」イベントを実施してきた。

このイベントでは、模試の当日や前日に、Zoomなど双方向でのやり取りができるオンラインツールを使って、ライブでの説明会・相談会を実施してくれている学校も50～60校あるが、それ以外にも「いつでも見られる学校紹介・説明会動画」を提供してくれている学校を入れると130校を超え、9月6日現在でアップされている動画の数は、すでに500本以上になっている。

そして、これらの動画は、各校ごとに季節に応じた新たな動画ができるたびに更新され、それぞれの「学校のいま」をかなり身近に感じることもできるようになっている。

私立中のなかには、在校生の安全確保という理由から、この秋～今年度いっぱい为学校説明会や見学会を中止して、オンライン化したケース（聖光学院、筑波大駒場、立教女学院など）も出てきている。

今年度に限っては、そうした“コロナ禍”ゆえの「学校を見に行けない」場合の情報収集の方法と、

それでもオンラインなど別の手段で「学校を知る」ための工夫と姿勢、実際のアクションが、すべての保護者に求められると考えておくべきだろう。

そして、すでにそうした意識が中学受験生の保護者の間に浸透してきたのか、これまで各校で実施されてきた「オンライン説明会・相談会」への参加者（視聴者）は、例年の同時期よりも多いケースが大半だという。もっとも、往復の移動時間も含めた時間を割いて学校へ足を運ばなくても、自宅で「学校を知る」ことのできるオンラインでの説明会や相談会には、気軽に参加しやすいという側面もあるだろう。

しかし、だからこそ今年は、受験生と保護者、塾関係者がその気になれば、「より多くの学校説明会に参加できる」、「より多くの学校を知ることができる」ということもできるだろう。

そして、多くは7月以降、実際に学校に足を運んで、自分の目で学校を見て、雰囲気を感じることのできる機会も徐々に再開されてきた。9月に入ってから、ほとんどの私立中でそうした機会が設けられるようになった。ただし、これも年度当初の実施予定からは（コロナ感染拡大状況に対応して）何度か変更されているケースが多いため、関心のある学校については、各校のWebサイトで最新の情報を何度も確認しておく必要がある。さらには各回の参加定員は“密にならない”よう制限されているケースがほとんどなので、その点でも情報キャッチのためのアンテナをしっかりと立ておく必要があるだろう。

こうした点も意識して、積極的に「学校を知る」

努力をしていただくことが、来春2021年入試に向けての“合格へのカギ”のひとつといっても良いはずだ。

## 2024年度以降の大学入試に向けて 私立中の入試も多様化へ！

そして、もうひとつ意識しておく必要があるのが、お子さんたちが7年後に挑む、今後の新たな大学入試の変化だ。「2020年大学入試改革」の初年度である来春2021年1月の大学入学共通テストは、英語の民間検定のスコア導入や、記述式出題の先送りなど、正直なところ「尻すぼみ」になってしまった感があるのは事実だ。

しかし、本格的な改革をめざすとされている改革5年目の「2024年度大学入試」の当事者は、すでに現在の中学2年生。それ以降の学年の子どもたちは、いよいよ本格的に変わる新たな大学入試の当事者であることに変わりはない。

この“コロナ禍”も重なり、改革の話題もいったんは忘れ去られたかのような「2020年大学入試改革」だが、一方では、この間の各大学や小・中・高校に求められた教育のオンライン対応と全国の学校で急務とされたICT環境の整備が、先行きの大学入試の変化を加速させることにつながるという見方さえある。

8月には文科省が、来年度の小6、中3に実施する恒例の「学力調査テスト」を、「CBT（Computer Based Testing = コンピュータ・ベースト・テスト方式）」で実施するという方向性を打ち出した。これが本当に実現すれば、2024年以降の大学入試で「CBT方式」が導入される弾みとなることも予想される。

こうした5年後の本格的な「大学入試改革」を境に、大学入試が変わり、その先の社会で求められる力を育てるために、日本の教育全体が変わろうとしているなかで、私立中高一貫校は今後に求められる新たな教育を導入し、あらためて公立学校



男子校のなかでは、いち早くグローバル教育にシフトして注目されている海中（写真は2020年入試風景）。



の教育をリードする存在であろうとしている。

そのための新たな、中学入試における「アドミッション・ポリシー」を反映したものが、いま各校で導入～新設されつつある「新タイプ入試」だと考えてよい。

すでに今春2020年入試では、149校もの私立中学校が、こうした「適性検査型（思考力型・総合型・PISA型）入試」を実施し、来春2021年入試では、これを大きく上回る150～160校が導入すると見られる。

## “withコロナ禍”の2021年入試に登場するオンライン入試とは？ ～変化のなかにチャンスを見出す～

来春2021年の中学入試では、“withコロナ禍”の安全確保や、移動の制限や自粛を余儀なくされる状況下の受験生のために、中学入試の歴史では初めて、「オンライン入試」が登場する。一般入試に先駆けて実施される海外帰国生（別枠）入試では、いまま移動の制限がある受験生のために、すでに数校がオンラインでの実施を公表している。

しかし、**東京私立中高協会では9月3日に行われた理事会で、「来春2021年のオンライン入試の自粛を申し合わせた」**ことが伝えられた。

とはいえ、すでに一般入試でもオンライン入試の導入予定を公表している私立中が都内にも数校あり、それらの入試がどうなるか、今後の動向が注目される。下記に、そうしたオンライン入試の実施を公表している私立中の入試の実施方法（予定）の例をご紹介します。

### ●秀光 [1/11 秀光トライアル]

「秀光トライアル」(旧名称「東京入試」)の1次試験(4科)は、受験生の所有するPCもしくはタブレットにてブラウザから試験問題を一時的にダウンロードし、試験後に同ブラウザで自動的にアップロードできるサービスを利用。大学入試の共通テストのように、選択式で解答できる試験問題を検討中。この結果を調査書代わりに基礎学力の定着状況を確認するものとし、2次試験(オンライン面接)との総合判断に基づき最終合否を決める。一週間前に接続テストを実施。なお万が一、試験当日に何らかのトラブルが発生し、試験が受けられない、または途中で中断してしまったなどの事態に対応するため、翌日の午後5時以降に再受験対応あり。

### ●中村 [2/2PM 国算エクスプレス入試]

文字通り、出された問いに対して自分の言葉でエクスプレス(表現)する入試。国語で問われるのは、「基礎的な語彙力はもちろん、見たり聞いたりした情報を適切に表現する力」、算数で問われるのは「基本的な計算力に加え、解き方をきちんと順序立てて説明する力」。自分の考えをいかに表現できるかが評価のポイントとされる。なお、従来から行っているポテンシャル入試の面接は、本校受験かオンライン受験の選択が可能。



模試を受けるメリットは、多くの受験生のなかでの相対的な位置を知り、自分の目標への距離と課題を確かめることができることだ。

### ●青稜 [2/1PM オンライン入試①。2/2PM オンライン入試② 両日とも4科]

受験に際しては、受験生はデバイスを2つ用意する。1つは進行用としてZoomにログインしておく。もう1つは解答用(タブレットかPC推奨)。問題は出願時に告知するURLから特設ページへ飛び、当日問題ページに入る。問題はすべてGoogle formsで実施予定。各教科、シンプルかつミスなく採点までできる方法で、自由記述での解答方法も構築済み。「既成概念にとらわれず何ができるか、受験生たちが頑張った成果をどう表現してもらうかというスタンスで動いている」という。

### ●山脇学園 [10/17・18・24・25 (出願日による) 帰国生Web入試]

出願書類と、入試当日の課題提出による帰国生入試。課題提出には新たに開発した「帰国生専用LINE」を使用することで、全受験者の試験を同時間帯で同時に実施できる。事前に「課題配信と回答動画提出」環境テストを実施。

すでに東京大学大学院や慶應義塾大学の一部のAO(総合型)入試ではオンラインでの実施が公表されている。“withコロナ”時代の入試の手法として、また今後のICT社会における新たな入試のあり方として、教育界でも期待されているオンライン入試。それだけに、来春2021年入試での実現の可否に関わらず、その可能性や発展性には、中学受験生の保護者も引き続き注目していただくと良いだろう。

このほか、「英語（選択）入試」も今春2020年には141校で実施され、やはり来春2021年入試ではそれを上回る「150～160校」が実施する

と予想されている。

そうした「私立中入試の多様化」は、小学生と保護者から見れば「中学入試の間口が広がった」

## 2021年入試に向けて、さらに多様化する私立中入試のあり方《一部抜粋》

この2～3年の間に目立ってきた「私立中入試の多様化（＝新タイプ入試の導入）」は、来春2021年入試に向けてもさらに増加に拍車がかかっている。ここでは、来春入試から導入される、私学の新たなタイプの入試をご紹介します。

これらの新たな入試は、「コロナ禍」の影響もあり、来春入試からの新設・導入が公表されたのが6～8月のため、この10月段階では、受験生の保護者にはまだ十分に認知されていない。そのため、これから12月～来年1月にかけて、徐々に志望者が増え、2月の入試本番では、予想以上の志願者を集めるケースもあることに注目しておきたい。

### ◎芝浦工業大学附属の国・算「聴解（リスニング）問題」の導入と、「算数＋英語か言語技術」選択入試新設！

来春2021年から中学も共学化する芝浦工業大学附属中は、同時に大胆な入試改革も実施する。

2/1の第1回、2/2の第2回、2/4の第3回入試では、国・算・理の3教科のうち、国・算で時間内に聞いて解く問題（リスニング）を実施。国語では説明や指示を聞き、答えを聞いて選ぶ「聞く力」を確認。算数では図形なども耳からの情報でもイメージできる力を試すという。

2/2PMに新設される特色入試では、「算数＋英語もしくは言語技術」の選択式の入試が導入される。言語技術は論理的思考力、分析力、発想力、表現力を総合的に問う問題。「例えば与えられた資料を分析し、読み取った情報から自らの考えを組み立て説明するような、答えが一つに定まらない問いに対して、文章で自分の考えを説明する問題を出题」とされている。

系列大学とも近接する豊洲へのキャンパスへの移転以来、年々進化を遂げている同校だけに、この新たな入試の動向が注目される。

### ●海陽中等教育学校の「視聴型総合問題」導入！

海陽中等教育学校は1/9の入試Ⅱを「算数＋視聴型総合問題、または算数」で、2/7の入試Ⅲを「算数＋視聴型総合問題」で実施する。論理的思考力を問う従来型の出題を行う算数（60分）、音声を聴いたり映像を視たりして問いに答える形の視聴型総合問題（60分）。

視聴型総合問題では、日本語の文章を読み上げた音声を聴き、聴き取ったことについて問題に答える。アナウンスされた内容を理解したうえで、自分の意見を表現できる力を確かめる「国語分野」と、様々な現象の映像によって与えられた情報を正しくとらえ、論理的に思考し、表現できる力を確かめる「理科分野」、映像によって与えられた情報から大事なことを抜き出し、まとめたうえで自分の意見を表現できる力を確かめる「社会分野」から出題。

### ◆そのほか来春2021年新設の「新タイプ入試」！

●静岡聖光学院：1/10にプログラミング入試、英語入試



静岡聖光学院でも来春新設された聖光学院中の英語プログラミング入試風景。

を新設。1/9に21世紀型入試をオンラインで実施。

●大妻多摩：2/1の総合進学・総合思考力型入試〔読解表現（作文）・算数・合科適性〕を、適性型思考力入試〔読解表現（作文）・合科適性〕に変更。

●実践女子学園：2/1と2/2に思考表現入試を新設。思考力＋プレゼンで実施。

●清泉女学院：2/2PMに算数1科型入試を新設。

●中村：（前述の）オンラインで実施する「国算エキスプレスを2/2PMに新設。

●日本大学豊山女子：2/2PMの思考力〔プレゼン〕型入試（テーマ選択・情報収集・まとめ・発表）を、プレゼンテーション〔課題発見〕型入試（プレゼンテーション・質疑応答）に変更。

●藤村女子：2/1AMに「ナゾ解き入試」（4科に即した謎を解く謎検型15分とグループ形式の脱出ゲーム45分の問題解決）を新設。

●桜美林：2/3PM入試を、国算2科目入試から算数1科目入試に変更。

●開智：1/11PMに算数1科目入試を新設。

●啓明学園：2/1PMに英語1科目入試（面接なし。英検準2級レベル）を追加、新設。

●駒込：2/2PMに算数1科目（3ヶ年特待）入試を新設。

●昭和学院：1/20PMに算数1教科入試を新設（オンラインでも実施）。

●東京電機大学：2/1PM入試は、2科から「国語または算数いずれか1科目選択」とする。

●東京立正：2/13に自由研究SDGs入試を新設。

●東邦大付属東邦：12/1実施の推薦入試の定員を男女30名から40名に増加。

●新渡戸文化：適性検査型入試を導入。

●宝仙学園共学部理数インター：2/1PMに「オピニオン入試」を新設。

●目白研心：2/2に適性検査入試（Ⅰ・ⅡまたはⅠ・Ⅱ・Ⅲ）、2/3に算数1科入試、2/3PMに次世代スキル入試（グループワーク）を新設。

上記は、年々増加する私立中の「新タイプ入試」の一例だが、わが子のために、今後の教育と入試の変化を意識していくうえでも、見逃すことのできない動きだろう。



## 特集 **これが合格へのカギになる！** 2021年入試の変化のもとで、チャンスを生かす受験校の選び方

ということであり、多様な受験準備のスタイルを経てきた子どもたちが潜在的に持つ、多彩な能力や意欲、資質を評価し、私立中高一貫校に「迎え入れて」くれようとするものだ。

こうした新たな入試が、子どもたちの多彩な才能や資質、将来伸びる可能性を見出し、そこに光を当ててくれるものであるならば、それは歓迎されるべきものだろう。

それは、5年後の2024年度から「大学入試が本格的に変わり」、「日本の教育が変わる」節目を前に、その方向性を先取りした私立中高一貫校による「中学入試も変わる」というメッセージであり、ムーブメントでもある。

その意味でも、来春2021年入試に向けて、さ

らに「私立中入試の多様化」が進むという動きは、従来の「4科目」「2科目」入試の学校や難関校を志望する受験生と保護者も、やはり意識しておくことをお勧めしたい。

2026年度に大学受験を迎える現在の小6のお子さんたちが、「中学～高校の6年間でどのような教育を受け、どのような力を身につけるのか」が、わが子の将来にとってかつてないほど重要な意味を持つ時代になった。

そう考えて“わが子の強みを生かせる”受験校を選び、“わが子の長所を伸ばしてくれる”進学先を選ぶことが、実り多い合格を手にするための最大のカギになると考えていただくと良いだろう。

### 激動の2021年入試で“合格”を得るために、模試を上手に利用しよう！ ～「継続して受ける」ことで学力を育て、自信をつけることができる！～

首都圏模試センターの小6「合判模試」も、この10月4日で第4回を迎えた。6年生は12月までに残り2回、計6回の模試が行われるが、今年度は今回初めて私立中会場での実施となった「合判模試」の機会を、今後も十分に活用して、来春2021年入試での“合格”のステップにしていだぎたい。そして、こうした模試の上手な利用法は、何より「継続して受ける」ことだ。

それによって、

- ① 毎回の成績の推移と、受験生のなかでの自分の位置を知り、受験勉強の成果（手ごたえ）を確かめることができる。
- ② 志望校の最新の入試情報と人気動向を知り、ベストの受験（併願）作戦を組み立てていくことができる。
- ③ 毎回のテストで力試しができると同時に、中学入試の“合格”に直結する実質的な学力を育てることができる。

といった、いくつものメリットが得られる。そのためにも、毎回のテストでは、成績表や結果判定などのアウトプット資料をよく確かめ、試験問題や答案には何度も目を通して、しっかりと「おさらい」しておく必要がある。

また、最近の小学生の皆さんは、まだまだこういった長時間のテストを緊張感のある状態で受けることに慣れていない。これまでもお通りの塾での内部テストは何度も受けてきたと思うが、会場が変わって、周囲に初めて顔をあわせる子どもたちがいるなかでの（＝入試本番のような）テストには、また違っ



昨年11月4日（日）に行われた「合判模試」八雲学園中会場での学校説明会では、在校生から「ラウンドスクエア」についてのプレゼンテーションが行われた。

た緊張感がある。こうした雰囲気にはできるだけ早く慣れて、入試の本番でも感じるような、この緊張感も味方につけて、十分に力を発揮できるようになっておきたい。

保護者の皆さんは、毎回の成績や志望校判定に一喜一憂するのではなく、客観的に結果を受け止め、それをプラスに生かすための工夫をしてほしい。どのような結果（成績）であったとしても、その都度お子さんを励まし、学力的に成長するための材料にすることを心がけていだぎたいのだ。

また、テスト会場での説明会など、最新の入試情報が聴ける機会には、（今年はオンラインであっても）必ず参加して説明を聴いておくべきだろう。

こうして親子で上手に模試を利用することができれば、継続して受けることがやがてお子さんの自信にもつながり、来る2021年入試での“合格”への、力強いステップになるに違いない。

## 模試を受けることで、第一志望への課題と、ベストの併願作戦を組み立てるヒントを探ろう！ ～「継続して受ける」ことで、合格へのチャンスが見えてくる！～

翌年の中学入試に挑む6年生が、模試を受けることで得られるメリットは、前のページのコラムで述べた通りだ。さらにこれを、親の立場で生かすべきことにしぼって、以下にポイントをまとめてみよう。

### ●第1志望校との距離を測り、課題を見つける

毎回の合格判定の結果や成績をもとに、お子さんの第1志望校の合格の目安（＝入試予想難度）と、現時点での成績とを考え合わせて、その学校への合格可能性や、そこまでの距離を測り、残された時間で何を重要課題として、親子それぞれが何をすべきかを検討する。

同時に、11月以降の模試の結果が出る頃には「受験する学校を確定する」気持ちで、併願校選びのための情報収集や検討を進めておく。

### ●豊富な経験を生かしたアドバイスを聞く

例年の模試の会場では、入試に向かうためのアドバイスが聞ける、保護者向けの説明会（講演）が行われていることが多い。今年はその多くがオンラインで行なわれるが、そこでは、中学入試に関する豊富な知識や関わった経験・事例をもつ講演者から、入試本番に向けての準備や、入試の最中にも役に立つ話を聞くことができる。

また、単なる情報だけではなく、わが子のサポート役を務めるなかで、迷いや悩みをもつ保護者を励まし、力づけてくれるような話も聞ける。そうした機会には、積極的に足を運んで、勇気や元気をもらうことができるといいだろう。

### ●志望動向の変化による予想・分析を生かす

毎回の合格判定では、その月の志望動向（志望者数や成績分布）などをもとに、入試予想が立てられ、それが翌月の合格判定に生かされる。

そうした志望者数の数字やデータは、個々の成績表（アウトプット）にも反映される。それぞれの志望校の動向は、個々の成績表を見ることでわかるが、もうひとつ、全体状況のなかで、それぞれの動向がどうなっていくかという予測・分析については、やはり専門家の意見を聞いたり、配布された詳細な資料を見るが必要になる。

それまでは気がつかなかった視点や、見落としていた情報を提供してくれることも多いはず。



今年度の模試保護者会は原則として私立中会場では実施されていないが、代わりにオンラインによる保護者会講演代

この時期までに、おそらくほとんどの家庭では、わが子の第1志望校、第2志望校については、詳細な情報を集めて、その学校についての理解を深めていることだろう。しかし、第3志望以下の併願校については、まだ十分な情報収集ができていないのではないだろうか。

そうした併願校選びに際しては、これまで持っていた知識や視点での見方だけではなく、新たな知識や視点に気づかせてくれる専門家の意見が役に立つことが多い。たとえば、それまではわが子に午後入試を受験させることを考えていなかった保護者が、模試でのアドバイスを聞いたことによって、そのメリットや意味を知って、入試後になってみると「午後を受けておいてよかった…」と思えることも多いのだ。

### ●併願校を選ぶ多様な視点と最新情報を生かす

上に述べたことは、入試状況を知るためだけではなく、それぞれの学校を、もっとよく知るためにも大切な。

とくに併願校を選んでいく際には、ややもすると、古い情報や評判にとらわれて、選択の幅が狭くなりがちなることも事実。数年前までは、まだ成果の出ていなかった私学が、最近になって目覚ましい成果や実績を上げ、急速な変化・発展を遂げて、今後が大いに期待できる学校になっているケースは多い。

最新の学校情報によって、そうしたことに気づかせてくれるのも、模試を受けることで得られる大きなメリットといえることだろう。その意味では、今年はオンラインでの保護者向けの説明会（講演）や配布資料に、しっかりと耳を傾け、目を通していただくことが望ましいと強調しておきたい。